

エチオピア・ティグライにおける

元女性兵士の現在

真城百華

◆はじめに

1974年にデルグ政権が発足した翌年の1975年に、エチオピア北部ティグライ州においてティグライ人民解放戦線（Tigray People's Liberation Front, 以下TPLF）が発足した。TPLFは隣接するエリトリア州（当時）のエリトリア解放戦線と協力関係を築きながら、山野でゲリラ活動を展開し、デルグ政権と戦いを繰り返した。TPLFは、1991年以降に新政権を樹立するなかで中心的役割を果たしてきた。

2003年から2年にわたる筆者のエチオピア・ティグライ州滞在の間に出会った人のなかに元TPLF兵士が多くいた。現政権の成立を支えてきた人々であるため、州政府やウォレダのスタッフには元TPLF兵士が多かった。ウォレダ・オフィスで役職についている元兵士は圧倒的に男性で、彼らが職を得た背景には過去にTPLFに参加していたことが大きく影響している。一方、TPLFは1975年発足時から女性も男性と同様に兵士として動員していた。1990年初頭に7万人いたといわれるTPLF参加者のうち、3分の1が女性兵士であったといわれる。しかし過去にTPLFで戦ったことを誇らしげに語る男性の元兵士と比して、元女性兵士にあう機会が少なく感じていた。

◆元女性兵士たち

筆者がティグライ州の州都であるメケレに調査拠点として居を構えた際、同じコンパウンド内にトゥグストという元女性兵士がいた。彼女は同じくTPLFの兵士だった夫と結婚し、民主化後は看護師として働きながら子供をもうけていた。夫は軍にとどまり、遠隔地に駐留しており、年に1カ月ほど帰ってくるだけだ。現政権では女性を国

軍の兵士として採用していないため、民主化以降、隊を離れるにあたって一時金を貰い、その後戦闘時代の経験を生かして軍の病院、または公立の診療所などで看護師として働く女性が多い。現在看護師として働く元女性兵士は、軍に所属し民主化（除隊兵士訓練）プログラムの支援を受けて看護師の訓練を有給で受けたものがほとんどであった。男性のなかにも看護師の資格をとる者もいたが、30代後半から40代の年齢層の女性が最も多い。

近所づきあいのなかで、元女性兵士と仲良くなり、午後2時を過ぎると、娘がコーヒーセレモニーに来るようにと毎日のように誘いに来た。2時間かけて3杯のコーヒーを飲み、家族のことなど話すうちに、彼女が元女性兵士だったことを聞いた。自分より10歳ほど年上なだけの彼女が、13歳のときから家族と離れ、銃を持ち戦っていたという事実には衝撃を受けた。「なぜ、参加したのか」との問いかけに、彼女は淡々と「学校もなかったし、他にすることがなかったから」と答えた。14歳の時にはデルグとの戦いの最中に銃で足を撃たれて負傷し、今でも銃弾の痕が残る。高地で夜は冷え込むなか、古傷が痛むといっちは傷をさすっていた姿が印象的だった。

彼女の家でコーヒーを飲んでいると、毎日女性の友人が訪ねてくる。彼女の友人の多くも元女性兵士であり、夫は軍人、自分は看護師とトゥグストと同じ境遇の者たちだった。

これら友人たちがトゥグストと同じ元女性兵士と知るまでにはかなりの時間がかかった。家庭を築き、妻として母として生きている彼女たちの姿から、迷彩服を着て銃を構え、野山を駆け回っていた姿を想像することは困難であった。元女性兵士が不可視化されている主な原因は、元女性兵士

が兵士であった過去を語りたがらないせいでもあった。むしろ自分から過去を話すトゥグストが例外的であった。民主化後に平和が訪れるなかで、都市化が進み、新興住宅地のなかであっても、隣近所ではそれぞれの出身地や家族、過去を知っている者が多い。彼女たちの兵士としての過去に否定的な感情を持つ者も少なからずいるのが現状である。コーヒーを飲みながら、闘争時代の英雄をたたえる昔の音楽などがかかると、彼女たちが思い出話をはじめ。トゥグストが笑いながら、私に向かって「彼女は銃の扱いがうまくて、昔英雄だったのよ」と友人の過去を教えてくれる。何回もコーヒーと一緒に飲みながら無駄話を繰り返してきた人であっても、ここで自分が話題に上ると一瞬身構える。私が彼女たちの経験に対して肯定的な発言をすると、彼女たちの緊張も徐々に解け、私も少しずつ彼女たちの昔話の輪に入ることができた。とはいえ、何度もこうした昔話に加わり、個人的にとっても親しくなっているが、私には決して兵士時代の話をしなかった女性もいる。

私の周りには30代後半から40代の元女性兵士が多くいた。13、14歳でTPLFの勧誘により家族から離れて戦闘に参加した者もいれば、家族がデルグ政権によって殺されたことをきっかけに参加した者もいる。トゥグストと同郷の者や親戚の者もいたが、ティグライ州各地の出身者がおり、当時のTPLFの影響力の強さをうかがうことができた。たまたまトゥグストの元に遠方から訪ねてくる友人も、ほぼ例外なく元女性兵士であった。仲良くなった他の元女性兵士の家に行くと、驚くことに4軒の賃貸コンパウンドすべてが元女性兵士の家であったこともあった。彼女たちは、デルグ時代にともに戦ったというだけでなく、兵士、看護師、軍人の妻という同じライフコースをたどるなかで、家族、親戚と同等の関係を築いているようだった。

◆女性兵士の道へ

また、彼女たちの出身地や家族のことを聞くと、その多くは学校もなく、地方の中心地である町にもほど遠い僻地の農家出身者が多かった。TPLFは結成当初ティグライ州西部で活動を広げ、都市部がデルグ政権に掌握されるなかで、アクセスの困難な農村部で兵士をリクルートしていったため、

女性に限らず参加者には農村出身者が多い。そして、農村でリクルートされた兵士はゲリラ戦の最前線で戦っていた。当時の生活は、野営が中心で、昼間は1時間ずつ仮眠を交代でとっては、デルグ軍に居場所を確定されないように常に移動し、主に夜活動していたことや、食料不足でねずみを捕獲して食べていたとか、飲み物がないときは尿を飲んでいたりとか、過去の思い出を懐かしそうに語っていた。TPLF結成当時は、女性に対する教育プログラムも盛んであり、学校も設けられていた。しかし、デルグとの交戦が激化するなかでこうしたプログラムは縮小され、女性も貴重な戦力として積極的に戦場に赴くようになった。

私が接した最高齢の元女性兵士は、レティッシュという50歳の女性であった。調査アシスタントの親類であった彼女に会ったのもまた偶然であった。彼女のような年齢の女性に敬意を表して使う「ママ」をつけて名前を呼ぶと、「私にはママはつけないでいいのよ」と彼女は言った。彼女はTPLFが結成されると20歳で兵士に志願し、その後20年にわたり兵士として戦い続けた。彼女は自分の経験を淡々とではあるが誇らしげに語り、当時スーダン経由でTPLFの支援に来た外国人と接した思い出を語った。彼女は今も独身であり、たまに親戚の家々を訪ねる以外はすることもなく、ひとりで生活していた。TPLFに参加していたために民主化後に政府から住居のための土地を与えられ、現在は恩給をもらって生活している。看護師として働く世代の女性兵士より一世代上であり、民主化後に12年生までの教育を受ける機会は与えられたものの、働く機会は与えられず恩給に頼って生活することになったという。同年齢の元男性兵士が、恩給として与えられた土地で農耕地を増やし、役人として登用されていくなかで、同じ兵士として働いた女性のなかに家族もおらず孤独に生活するレティッシュのような存在もいることを知った。同時に、元女性兵士のなかでも世代によって多様な現状を垣間見たように感じた。

◆兵士の生活

結成当時のTPLFでは、兵士間での恋愛、婚姻が禁止されており、恋愛関係にあることが判明すると銃殺刑に処せられることもあったという。恋愛と婚姻の禁止規定が原因でTPLFを離れる兵士

が増加したこともあり、10年後に規定は解かれたという。先述したトゥグストたちは婚姻の禁止規定が解除された後にTPLFに参加した兵士たちであったが、レティッシュの世代の兵士たちはこの禁止規定の縛りが厳しかった世代であったことも、彼女が未婚である原因かもしれない。

トゥグストたち30代、40代の者は、戦闘の現場で同じ兵士仲間に祝われながら兵士仲間と結婚し、結婚式の真真事のようなものをしたとっていた。しかし、銃弾の下を潜り抜ける毎日で、夫と別の隊に編成されると、次にいつ会えるか分からない状況だったという。戦闘中は子どもをつくることは出来ず、今は非合法化されている妊娠中絶も頻繁に行われていたという。民主化後にやっと子供をつくることできるようになったという。この世代の元女性兵士はエチオピア人の平均から言うと初産年齢が高めの傾向にある。

◆民主化後

元女性兵士の民主化後の経歴には看護師や教師として働いたり、年金を貰って引退したりという例のほか、政治や行政に携わる職についた者もいる。民主化後に省庁内のジェンダー均衡が図られるなかで、数人の元女性兵士が役人として登用されていった。ティグライ州において、元兵士が登用される傾向は女性に限ったことではなく、元兵士だった経歴が出世の第一条件となっていた。しかし役人として登用された人々の例を見ると、男女比の不均衡があるのは一目瞭然である。また、こうした要職についている女性の多くは、デルグ政権下で大学教育を受けた後にTPLFに参加した者が多い。実際に前線で戦闘に加わることは少なく、政治宣伝に携わったり、中核でブレインとして参加していたものが多いと聞く。

兵士を引退した女性たちは、それぞれに新しい人生を歩み始めたが、多くの人々の人生は決して平坦なものではない。学校もない地で育ち、その後戦闘のみを行ってきた彼女たちは、民主化直後、高校レベルの教育を終えるために、それまで各人が受けた教育レベルにあった教育プログラムを受けることとなった。ジンマにプログラムを行う学校が建設されたためにティグライからジンマに行き、午前、午後と集中的に授業を受けて12年生までの教育を5年間で終えた者もいた。ティグライ

から多くの女性が教育を受けるためにジンマに移住し、共同生活を送りながら学校教育を終えたという。この教育プログラムを受けている間に子どもをもうけた者も多い。ジンマで教育を受けた者の多くは夫が軍隊に残っており、夫と会えるのは年に1回か2回である。夫の駐留地が遠隔地であれば1年以上会えないこともある。夫と離れ、自分の家族とも離れたジンマで同じ境遇の元女性兵士たちと共同生活を送るなかで、元女性兵士同士の絆はさらに強められていった。当時は教育プログラムを受けながら、1月145ブルの手当てが出されていたという。家を借り、子育てをしながら教育を受けるには手当てだけでは十分ではなく、夫からの仕送りがなければ生活が出来なかったという。その教育を終えた後の選択は各人自由であるが、闘争時代の経験を生かして看護師となったものが多い。教育を終えた彼女たちはティグライに戻った。ティグライでは医療施設の建設ラッシュに人材育成が追いつかず、彼女たちは僻地の医療センターに派遣された。また、エリトリアとの国境紛争が起こり前線となったティグライ北部で負傷者の救護にあたった者もいた。

元女性兵士から看護師になった者には、その後さらなる医療訓練の必要性があり、技術向上を目指した者は軍が経営する看護師研修センターで1年間集中的な訓練・教育を受けた。ここでの教育も詰め込み教育で、寮生活をしながら土曜にも授業が行われた。家族の支援などを受けて、子供を親戚などに預けてこの研修センターに入った看護師は1年間で450人にのぼる。ティグライ出身者が多数を占めるが、アムハラ州、オロモ州などから参加した元女性兵士もいたという。

◆とり残されていく元女性兵士たち

こうして看護師としての経験と訓練をつんだ彼女たちだったが、研修センターを卒業後1年たっても職場が斡旋されない状況にある。元女性兵士が学校教育を終え、医学の訓練を受けている間に、戦後世代である若い世代が医療現場の人材不足を埋め始めたのだ。12年かけて高校を卒業し、2年制の正規の看護学校を卒業した者たちに優先的に職業が提供されるようになってきている。他方、軍の研修センターで訓練を受けた者は看護師としての資格を一時的に保留にされている。正規

の看護学校卒業生との間に格差が生じており、就職の際の差別化につながっているため、元女性兵士の間にはカリキュラム作成やその後の対応に制度上の不備を感じている者が多く、担当官庁に説明を求めて交代で日参していた。正規の看護学校に通うためには高額な授業料が必要であり、農村出身で家族の支援も受けることができず、また子育てもしていかななくてはいけない元女性兵士の世代は、民主化プログラムの支援なしで正規の看護師と同等の訓練・教育をこれから受けることはほぼ不可能な状況にある。

軍で訓練した看護師を民間、または公立の病院に受け入れさせるために、軍と保健省の間で合意に達しない点があったのだろう。保健省の役人と個人的に話したときに、最初に女性兵士を医療機関で受け入れたときに、字が読めない看護師がいたり、彼女たちが受けてきた医療訓練に不安を感じる者がいたため、各医療サイトで元女性兵士出身の看護師に対する不満が生じたことが受け入れ拒否の原因といわれた。元女性兵士出身の看護師に対するこのような認識がどの程度普遍的なのか、また、これは単に受け入れを拒む建前として使われているのか、など疑問は残る。しかし民主化プログラムにのっとなって正規の看護師と同等の教育を修め、専門的な看護訓練をつんだ元女性兵士が要件を満たしていながら、若い世代に居場所を奪われていく現状には違和感を覚えた。

デルグ時代のTPLF兵士としての貢献、エチオピア-エリトリア戦争での後方支援、看護師不足のなかで僻地での医療活動など、さまざまな過程で表に立たずに新政府建設を支えてきた彼女たちが、現在、制度が整備され人材育成が追いついてきたなかで取り残され、使い捨てられているのである。

軍の医療学校を終えたあと、1年間は月300ブルの給料が支払われていたが、軍の看護師担当部は保健省との就職に向けた交渉が行き詰まり、看護師の勤務先を見つけることができなかった。財源確保に行き詰った軍は1年後に看護師たちの給料支払いを停止し、元女性兵士の就職ならびに雇用の保証ができないとの通達が出た。民主化後、10年が経過し、国際社会の援助に基づく元兵士に対する民主化プログラム支援がなくなったことやTPLFの兵士として果たした役割が過小評価され

るようになったことが影響しているのではないだろうか。

元女性兵士の夫の多くは現在も兵士として働いている。エリトリアとの国境紛争の際に夫を失った者も多い。夫を亡くした家族への手当ては月90ブルであり、残された家族を支えるために母親が働かなければ、子供を養いながら生きていけない状況にある。職を得ることのできない未亡人にはさらに重い現実としてのしかかっている。

◆過酷な現状

2005年2月にTPLFは結成30周年を迎えた。5月に総選挙を控え、TPLFが地盤固めもかねた結成の祝賀式典を行う準備を進めるなか、看護師たちに新たな通達があった。ティグライでは、これらの看護師を受け入れる場がないために、妥協策として看護師が不足しているアムハラ州やオロモ州の医療センターに就職するようとの通達であった。この通達を受けた看護師たちの落胆は大きかった。命をかけてTPLFとともに戦ってきたという自負を持っていた彼女たちは、自分たちがティグライでは必要とされず、さらに生活が困難な僻地の医療センターに追いやられているように感じたのであろう。この通達に不満を感じつつも他州での就職以外に道がないと知ると、未亡人など生活が苦しい者から他州での就職を受け入れていった。しかし教育施設も満足にない地域の医療センターに配置が決まると、子どもを親戚にあずけざるをえず、働くために一人で以前よりも過酷な職場に赴任していった。

同じTPLFのもとで解放を目指した元兵士の意識は、それぞれが民主化後にたどった道を反映するかのよう多様化しているように感じた。現政権に移行して10年以上が経過した現在、さまざまな状況に置かれているティグライの人々は、それぞれの思いを持ってこのTPLFの結成祝賀式典を、そして2005年5月の総選挙を迎えていた。行政機関のスタッフとして職を得たり、農耕地を拡大して裕福になった農民や、除隊一時金を元手に事業を展開して成功していった元男性兵士と比して、元女性兵士が民主化後にたどった道は困難の連続であったように思う。TPLF時代の思い出が薄れていくなかで、ティグライで絶対の支持基盤を持っていたTPLFの求心力が徐々に弱くなっていく

ように感じた。

私が調査地を離れる直前に、友人であった元女性兵士たちが次々と新しい赴任地であるアムハラ州に旅立っていった。それぞれ複雑な思いを抱えながらの再出発である。調査地に戻っても彼女た

ちに会うことはかなわなくなったが、新しい職場で彼女たちがどのように生き抜いていくのかをみていくことは、変革を遂げていくエチオピアを見る貴重な一視点であるように思う。

(まき・ももか/津田塾大学)